

まちづくりの担い手としての立場の変化と 地域の受容

片岡 由香¹・羽鳥 剛史²

¹正会員 愛媛大学 講師 社会共創学部環境デザイン学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3 番)
E-mail: kataoka.yuka.kq@ehime-u.ac.jp

²正会員 愛媛大学 准教授 社会共創学部環境デザイン学科 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3 番)
E-mail: hatori@cee.ehime-u.ac.jp

地域におけるまちづくりの場では、能動的かつ継続的な展開を目指していくことのできるような担い手が求められることが多く、そのような担い手育成に取り組むことが求められている。これまでの筆者らの実践研究においては、学び手が「まちづくりの担い手になってみる」場の設計が必要であると考えており、その過程における学び手の立場性の変化に着目した考察を行ってきた。本稿では、現在は担い手としての意識を自覚しまちづくり活動を継続しているケースを対象に、これまでのまちづくり活動のプロセスにおける地域のステークホルダーの関与と受容に着目した分析を行なう。そのことによって、まちづくりの担い手育成の場を設える際の戦略的手法について考察する。

Key Words: local collaboration, practical learning, systemic design

1. はじめに

研究者が都市の諸問題を研究対象とする場合に、まちづくりの現場に関与する機会が少なくない。また、「まちづくり」そのものを対象として研究する研究者は、研究者自身が、地域のステークホルダーと関係を築きながら研究対象に向き合うケースも増えている。そのような地域課題の解決や公共政策の現場においては、まちづくり活動を主体的に進めていくことのできる人材や、能動的かつ継続的な展開を目指していくことのできるような人材が求められることが多く¹⁾、そのような人材の育成に取り組むことも求められている。

人材育成の場においては、市民講座のように研究者が地域のステークホルダーに対して専門分野での知識を教授するという受け身の形ではなく、「研究者と現場のステークホルダーが、どのような関係性を、どのように築いていけば良いのか？」を問う必要がある。つまり、研究者自身をまちづくりのステークホルダーの一主体として、自らの立ち位置（立場性）を相対視する視点が必要となる。つまり、「行政—大学—市民」というステレオタイプの文脈を当然視するのではなく、こうした見立て自身を可変なものとする脱文脈的視座、関係性のダイナミクスを認識するための枠組みを再構築する必要がある。

以上の問題意識のもと、前稿²⁾では、まちづくり人

材育成プログラムを通して担当者が学び手と地域のステークホルダーとの協働を生み出す場を設える上での実践的方法について、自律的・持続的な活動を展開する担い手の成長過程について取り上げ、考察した。

前稿に続き、本稿では、「まちづくりの現場において、まちの課題に主体的に取り組む人材が生まれながら、まちが漸進的に発展していくダイナミズムを生み出す上で、研究者自身が現場のステークホルダーとどのような関係を築き、どのような「立場」で関与すべきか」について、研究者が主催するまちづくりの担い手育成の場を対象に明らかにする。担い手育成の場に参加している地域のステークホルダーに着目し、ステークホルダー自身の立場性の変化やモチベーションについて明らかにし、地域協働の場におけるダイナミクスの変化を表現することを目的とする。そのことによって、ダイナミックな進化を伴う現場の生態的知識を蓄積し、研究者が現場に関わる際の「構え」を導きたい。

2. 研究対象

(1) 担い手育成プログラムの主催者

本稿で述べる研究者（本論の著者）は、後述の「松山アーバンデザインセンター（以下、UDCM）」にディレクター、副センター長として所属しており、UDCMの取り組み内容については既発表の論文³⁾⁴⁾に示して

組織としては、松山市内の公共空間の再生における課題を解決すべく、2014年2月にUDCMを発足した。研究者らは松山アーバンデザインセンターの構成員として、2014年11月より、地域の課題解決を目指しながら、まちづくりについて実践的に学ぶ担い手育成プログラム「松山アーバンデザインスクール(Urban Design School; UDS)」を開講してきた。UDSの取り組みについても既発表の論文にて報告している⁵⁾⁶⁾⁷⁾。

(2) 担い手育成プログラム概要

UDSは、松山市内に在住する学生と一般市民が、地域のステークホルダーの協力を得ながら、まちの魅力創出や課題解決に関する活動を実践する中で、まちづくりの進め方を学んでいく市民参加型・体験型の学習プログラムである。運営については、松山市内の4大学(愛媛大学・松山大学・聖カタリナ大学・松山東雲女子大学)の教員が運営委員会を組織し、カリキュラムの設計や運営を担ってきた。また、受講生の活動を運営委員会の大学教員(本稿の著者を含む)とUDCMのスタッフがプログラム全体のコーディネーターとなり、活動内容や進捗に応じて地域のステークホルダーを紹介することで受講生が地域との接点を持てるように支援している。

UDSのカリキュラムは約1年かけて実施される。第1期は2014年11月から2015年11月にかけて実施され、受講生25名(社会人4名、学生21名)であった。第2期は2015年12月から2016年11月にかけて実施され、受講生は29名(社会人8名、学生21名)であった。第3期は2017年5月から2017年12月にかけて実施され、受講生は28名(社会人7名、学生21名)であり、第4期(2018年5月~12月)では28名(社会人4名、学生26名)が、第5期(2019年5月~12月)では28名(社会人4名、高校生8名、大学生16名)が企画・実践に取り組んできており、現在第5期生までの活動が終了し、2020年度はCOVID-19の影響を受け実施はできなかったが、今後も継続実施を予定している。プログラムの流れは図-1の通りであるが、このプログラム以外に進捗に応じて各チーム毎に活動を行っている。

これまでの第1期~5期までの受講生による活動内容は、運営者側で特定のテーマを定めず、まちの課題解決を念頭に置きながら、受講生自身が自分達の関心のあるテーマを決めて、まちづくりの企画実践に取り組んできた。なお、活動地域は松山市内で自由に選択することが可能であるが、プログラムの過程で受講生を地域のステークホルダーに繋ぐ必要があるため、UDCMのスタッフや大学教員が関係を持つ地域を推奨している。

本プログラムは、この一連の活動を体験することによって、地域の関係者と連携しつつ、まちづくりに携わる上での基本的な素養や問題意識を学ぶことを目指してお

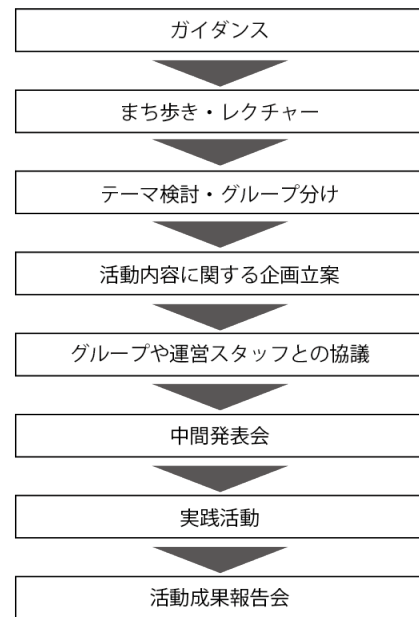


図-1 UDSのプログラムの流れ

り、ファシリテーターやコーディネーター等の特定のスキルや専門能力の習得を目指したものではない。言い換えれば、受講生はまちづくりの担い手の立場に“なってみる”という経験を得ることが求められ、研究者を含むまちづくり担い手育成の担当者には、学び手が初学者なりにもまちづくりの担い手に“なってみる”場を設計することが求められる。

3. システミックアプローチと担い手育成の場づくり

(1) UDSでの活動終了後も自主的に活動を継続しているグループ

本プログラムの受講生は、ほとんどが約1年の活動を終えた後はグループを解散しているが、中には、自主的に活動を継続し、UDS受講生としての活動から発展しているグループが見られる。本稿では、そのようなグループを取り上げ、受講生が実践活動するにあたり協力者として関わる地域のステークホルダーに着目し、ステークホルダー自身の立場性の変化やモチベーションについて明らかにする。

本稿で対象とするグループは、「イトコ道後」というグループ名で、2017年度(UDS第4期)より本プログラムに参加し、翌年のプログラム修了後も自主的に集まり活動を継続している。グループの活動内容は、松山市の観光拠点となっている道後地区内の上人坂とその坂上部に位置する宝厳寺に着目し、宝厳寺の境内に仮設的にベンチを設置し、夕焼け鑑賞と道後地区の歴史を発信することを目的としてツアーを実施している。

本グループのこれまでの活動の経緯について、グループの代表者にヒアリング調査を行い、図-2の通り示す。

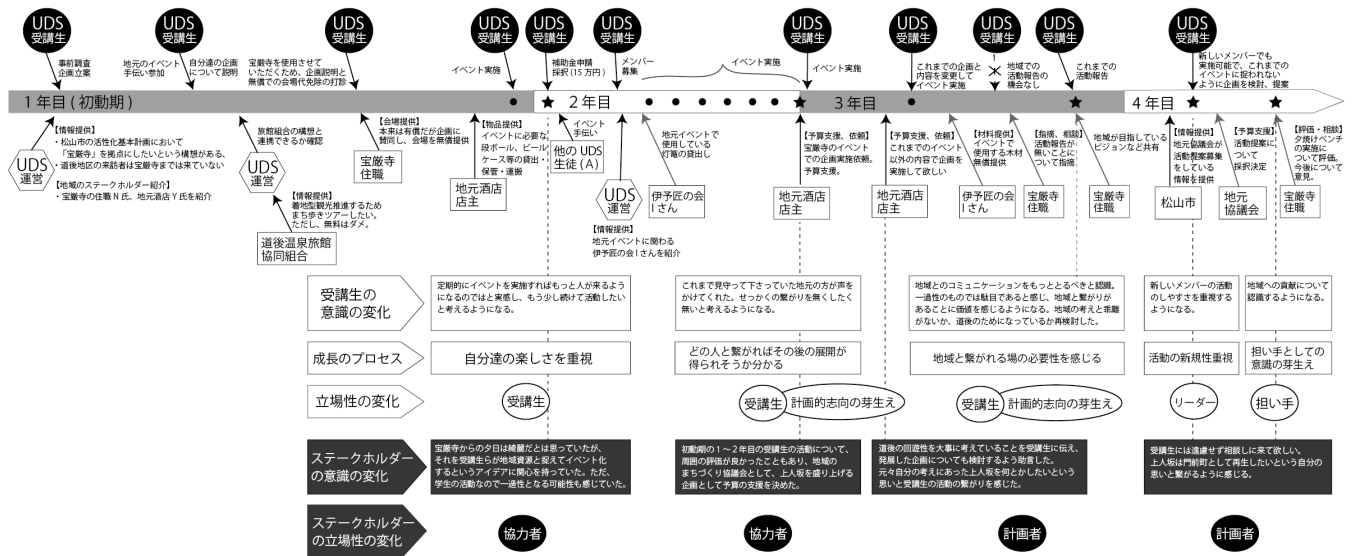


図2 イイトコ道後の活動プロセス

図-2では、上部にグループの活動プロセス、その下部に活動継続によるグループ代表者の意識の変化および、「立場性」の変化について整理した。図中の UDS 受講生がイイトコ道後というグループを示し、UDS 運営は大学教員などの運営者、「地元酒店店主」「宝蔵寺住職」については、地域のステークホルダーを示している。

(2) 地域のステークホルダーによる「立場性」の変化

図-2で示している地域のステークホルダーのうち、本グループの活動支援の中心的人物として、地元酒店(明治19年創業)の店主であり、地域のまちづくり協議会の事務局を担当されているY氏に、これまでの受講生への支援内容、受講生への意識の変化、立場性の変化についてヒアリング調査を行った。その結果を図-2の最下部(黒塗り部分)に示している。

受講生の活動初動期については、運営スタッフからY氏を受講生に紹介し、受講生自らがY氏に相談して、実践活動を行う際の椅子に代わるビールケースの貸し出しやイベント実施日までの備品の保管場所の提供について協力を得た。その頃のY氏は、「学生さんの活動は一過性のものが多いので見守る程度、依頼があれば協力してあげたいという気持ちで接していたが、他の学生と比べて初動期から熱量は感じた」「夕日を地域資源として捉えた企画内容に共感し、自分達では思いつかないアイデアだと思った」という意識であった。

受講生の活動が2年続き(本来、本プログラムは1年で修了となる)、Y氏の意識については、「他の学生さんの活動とは異なり一過性のもではない」「これまでの活動について、周囲から評価の声を聞いており、まちづくり協議会から予算的支援をしたい」「若い人に道後

をどのようにしたいと思ってもらいたい」と考えるようになった。また、その後Y氏の方から受講生に対し、これまでの企画内容から発展させるような企画内容を考えるように提案している。その際、上人坂は道後地域の中心部から少し外れているため、道後の中心との接点を持つて欲しいことや、道後の回遊性について考えて欲しいといった自分の考えを伝えた。それを受けて受講生が企画を検討し、まち歩きツアーを考案し、実践している。この頃からY氏は、地域をデザインしていくような意識を持っていたと話しており、「計画者」的な立場性の変化があったと考えられる。

このように回遊性のことを意識した企画内容の検討についてY氏が提案した背景には、上人坂の近所で長年育ったY氏ならではの思いがある。上人坂については、古くは宝蔵寺の参道であり、その後遊郭が集められたが(松ヶ枝遊郭)、国の法律施行により廃業となった遊郭はスナック街(ネオン坂と呼ばれていた)となり、スナック街が廃業となった後は更地化が進んだ。その後、上人坂では、「一遍市」という地域を盛り上げることを目的としたイベントが月に一度開かれていたが、2012年頃に主催者の都合により無くなってしまった。その後、道後地区で開かれるようになったアートイベント「道後オンゼナート」にも協力し、上人坂がイベントの拠点になったため、ギャラリーとして店の倉庫を貸し出している。

Y氏は、坂が廃れていく姿を長年見てきたため、何とかしたいという思いでまちづくり協議会に参加するようになった。まちづくり協議会では、次の30年後のまち構想を検討しており、そこでも道後地区の回遊性について議論されており、Y氏自身も30年後の道後の将来に

ついて意識している。

その後、Y氏はまちづくり協議会として、受講生への予算支援をしており、その頃から現在の自身の意識を尋ねると、「上人坂を門前町として再生したいという自分の長年持ち続けてきた思いと受講生の活動が繋がってきた」「初動期とは異なり、活動が継続していくにつれ、受講生らが巻き込んできたという感覚もある。受講生には遠慮せずに相談しに来て欲しいと思っている」との回答が得られた。

4. おわりに

UDS の取り組みでは、参加者が初学者なりに担い手の立場に立ち、自分達のまちづくり活動の意味や意義を批判的に捉える中で、言わばそれと同時相即的に、彼らの第 2 の自我として理想的なまちづくりの担い手像が形成された可能性について示唆を得ている⁶⁾。

本稿では、担い手育成の場において、育成に関与する側の地域のステークホルダーの意識の変化および立場性の変化に着目して整理、考察した。

その結果、地域のステークホルダーは、担い手の立場になろうと活動を続ける受講生に対して、活動初動期においては、協力者としての立場であったが、活動が継続され、かつ、ステークホルダー自身が持つ地域の課題意識や構想と繋がった際に、計画者としての立場性へと変化したことが明らかになった。

また、研究者自身も人材育成の場づくりに取り組む中で、受講生と地域ステークホルダーの間に入り自らもステークホルダーとしての立場性の変化を認識することがある。このような過程においてシステムミックアプローチ

を検討することで、ダイナミクスを表現するための「語り口」の作成を試みる事が可能であると考える。

参考文献

- 1) 渡邊晃佑, 有田智一:住民主体の住環境エリアマネジメントの自立プロセスに関する研究, 日本都市計画学会 都市計画論文集, vol.51,Np.3,2016.
- 2) 片岡由香, 羽鳥剛史:まちづくりの人材育成プログラムと連動した地域協働の場の形成, 土木計画学研究・講演集, Vol. 64, CD-ROM. (第 64 回土木計画学(オンライン), 2021 年 12 月 3 日)
- 3) 小野悠, 尾崎信, 片岡由香, 羽鳥剛史, 羽藤英二:地方中核市におけるアーバンデザインセンターの実践 松山アーバンデザインセンターを事例に, 日本建築学会計画系論文集, No.755, pp.167-177, 2019.
- 4) 志田尚人, 羽鳥剛史, 尾崎信, 小野悠, 片岡由香, 松村暢彦:公民学連携まちづくり組織のプログラム評価に関する事例研究「松山アーバンデザインセンターのロジックモデル作成事例」, 計画行政, No.43(2), pp.39-48, 2020.
- 5) 片岡由香, 羽鳥剛史, 羽藤英二:まちづくり実践学習のプログラム化と地域連携への展開可能性に関する研究, 土木学会論文集 D3, No.72, vol.5, pp.523-532, 2016.
- 6) 片岡由香, 羽鳥剛史, 河内俊樹, 直井玲子:まちづくり担い手育成プログラム:「松山アーバンデザインスクール」の意義と課題(特集 地域文化と地域経営), 地域デザイン学会誌 No.8, pp.189-208, 2016.
- 7) 小川直史, 羽鳥剛史, 片岡由香, 尾崎信:まちづくり人材育成プログラムにおける学習経験と担い手像の形成に関する研究-松山アーバンデザインスクールの試み-, 土木学会論文集 D3, No.76, vol.5, pp.569-588, 2021.

CHANGING POSITIONS AS COMMUNITY PLANNERS AND ACCEPTANCE BY THE COMMUNITY

Yuka KATAOKA, Tsuyoshi HATORI